

# 白金葭

3月号



平成29年3月発行

第73号

四月二十一日（金）〃 第五

五月十九日（金）〃 第五  
六月十六日（金）アビスター第四

兼題句参考句（四月二十一日分）

霞草、啄木忌

兼題..霞草、啄木忌  
兼題..新茶、雛団栗  
翡翠、黒鯛あくびしていでし涙や啄木忌  
うつうつと夜汽車にありぬ啄木忌  
ひとこのわれをかへりみ啄木忌  
便所より青空見えて啄木忌木下夕爾  
藤田湘子  
桂信子寺山修司  
安住敦  
吉田未灰

千葉浅沙男

関戸美智子

佐藤博美

阿部完市

鈴木しげを

椎名智恵子

石原八束

藤井恒子

細川加賀

花谷和子

脇役にひたすら徹しかすみ草  
霞草父親学級椅子浅し  
霞草紙人形も二重帶

横綱とあり一捌き春の塩

子等よりもショートスカート春三番

手賀沼やひかり満面東風の坂

ぱつちりと舊四五六涅槃寺

梅東風や麒麟の首とスカイツリーと

増田陽一

殖えすぎし鹿は喰ふべし安房七溪  
涅槃図に蛙は居たり居なかつたり  
利根水系彷徨ふ去年の迷ひ鮭

「不要捕捉野鳥」と札や轉れる

夕東風や瘤白鳥のはや眠し

光成高志

金棒を放り赤鬼涅槃哭く  
竜王は舌を長出し涅槃哭く

火の車の手もあり阿修羅涅槃哭く

杉花粉蒸氣機関車煙吐く

刈られたる東風の茶畑かがやけり

光 みち

目鼻なき和紙の雛の前を向く

涅槃会の花供御<sup>はなくそ</sup>という豆を買ふ

涅槃哭く氣絶の僧の横たはる

どこの子も胸を括られ東風の街

夕東風や胡麻跳ねるまで炒つてをり

松村幸一

又巻かれゆくなり涅槃変のまま

みな若くみな鬼籍なり春の夢

東風の旗に振られて征きし日がありぬ

居残るは連衆ばかりの涅槃かな

声あげて東風に乗つたる鳶若く

招かれし老女三人雛祭

吉羽多美子

すしめしを一気にさます春一番

東風吹くや天満宮の太鼓橋

涅槃図を村のはずれの寺に見る

春嵐びたりと止みて夜の明けり

倉田紀子

春の夢草間弥生に魂抜かれ

老いてなお親友のあり桜餅

春時雨木札一枚巴塚

朝東風やきのふはきのふけふはけふ

春の雷四つ身の柄に戦鬪機

浅野正美

荒東風は畑の土をまき上げて

涅槃像香の煙に包まる

強東風に梅の花びら散り敷かる

うららかや小さくなりし母と歩む

玉仏寺白玉石の涅槃像

武者昭七

東風かぜに乗りて優遊百合鳴

青木啓泰

涅槃西風海の碧さの日ごと濃く

北帰行翼休めて北の河

東風吹いて海鮮やかに藍となる

茜雲涅槃の絵図の輝けり

春泥を跳ばして学童道いそぐ

御仏は切れ長の目を閉じ逝きませり

寝姿の涅槃に似たる炬燵かな

東風吹きて沼ひろびろと鶴一羽

一文字に目と口を閉じ涅槃かな

東風運ぶ梅の香と行く野道かな

植物園甘草の芽を柵圍

小走りを止めて轟る黄鶴鶴

綱打ちのこゑこゑ春の遠からじ

涅槃哭く迦陵頻伽は尾を立てて

磯目健一

一句鑑賞

光成高志

涅槃西風海の碧さの日ごと濃く

昭七

今日は彼岸、涅槃西風がそよそよ吹き、前方の干拓田には霞が張っている。アビスタに行つて図書の延長をして帰り、夕方田中の道を犬を走らせていると紅玉の日輪がある。富士の方角の春没日である。掲句を改めて読んでこれが鎌倉であつたならと思った。地靈という言葉があるが、鎌倉の悲哀に満ちた歴史と風土を思うといつものあわれが私の胸を突く。日ごと濃くなる鎌倉の海を眺めて生活された昭七さんも折に触れて日本史のあわれに思いをいたされたのではなかろうか。「日ごと濃く」の措辞に往時の生活が思われた。

## 東風吹くや天満宮の太鼓橋

多美子

「東風吹くや」の上五は東風の吹く様を切字で切つてあり、その間に季感溢るる空間がひろがる。天満宮の太鼓橋という具象から東風吹くころの天満宮の他の物や佇まいが目に浮かぶ。私は龜戸天満宮や大宰府天満宮を思い浮かべた。更に住吉神社の反りの強い反橋を思い出して掲句を味わった。

## 涅槃哭く迦陵頻伽は尾を立てて

宏之助

涅槃の兼題を出した手前、もう一度涅槃図を拝んでおかねばならぬと思い、京都の泉涌寺に行きたかったが、遠方なので、関東のお寺さんをネットで探し、江戸川区の感應寺の涅槃図にまみえることが出来た。釈迦の涅槃に慟哭する菩薩や仏弟子会衆や動物に到るまで描かれている絵が涅槃図であるが、「天狼」の遠星集作家らによつてミミズに到るまで詠み尽くされているので、私は新しい物をと注意深く見させて頂いた。井上住職のお陰であります。掲句は人頭鳥身の迦陵頻伽は尾を立てて哭いているのである。極樂淨土から駆けつけた迦陵頻伽は尾を立てて美しい声で哭いているに違ひない。源氏物語にも舞があつた。

## どこの子も胸に括られ東風の街

みち

私たちの小さい頃は皆子はおんぶされていた。おしんのテレビドラマで子をおんぶして奉公する姿は懐かしい

かつた。現代はなぜかみな子を胸の前に抱く紐で括られる。東風の吹く街角で見かける現代風俗。

## 一句鑑賞

磯目健一

## 招かれし老女三人雛祭

多美子

たとえば「細雪」の後日光景。大阪船場の旧家、外へ嫁いだ三人に声をかけて四姉妹集まり雛壇の前で談笑している。老いてもそれぞれの容色は衰えずむしろ熟女の温雅さを増している。端麗な雛人形とともに桃の部屋は艶冶に花やいだ雰囲気に満ちている。

## 金棒を放り赤鬼涅槃哭く

高志

この世の終わりとみな嘆く愁嘆場の絶頂で、勇猛な赤鬼までもが大事な金棒を放り投げ徒手空拳を突き上げ慟哭せずに居られない。仏滅の悲嘆ぶりを喜劇的点景を捉えることで描き出す俳諧味が秀逸。

## 手賀沼やひかり満面東風の坂

孝三

我孫子は南北手賀沼を囲繞する丘陵地に発達した町で、数多い坂と谷津のすべてが手賀沼へ向いている。どの坂を下つても春光漲る沼が目の前に広がる。今年もまた東風の季節。春の到来を坂を吹いてくる風に実感するのである。

## 東風の旗に振られて征きし日がありぬ

幸一

今も忘れない青春の一日から茫々七十年余過ぎて

いる。その日も今日のよう東風が吹いていた。万歳万歳の声と日章旗に送られて出征したが、戦況悪化の中、生還は考えられなかつた。未来への絶望という断腸の思いを心の底へ必死に押し込めた一日の記憶がありありと甦る。

### 杉花粉山から天狗が飛んでくる

啓泰

どどどと山風だ。まるで天狗の大団扇に煽がれたよう、風に乗つて花盛りの杉林から花粉が人里へ襲つてくる。宮沢賢治の童話の世界を連想させるメルヘン風の句だが、詠んでいるのは花粉症患者にとってやりきれない自然災害だ。豪雨中止を八大龍王に必死に祈願した実朝の気持ちが共感できる。

### 涅槃図を村のはづれの寺に見る

多美子

「花すすき寺あればこそ鉢が鳴る」という來山の句にあるような村外れの侘しい寺での年一回の涅槃図開帳。普段は足遠い村人も山門をくぐつて法会に参じ、寺宝の涅槃図を拝観する。この日は村人に春の始まりが告げられ、明日からは農事の準備が始まる。仏との別れは復活祭でもあるのだ。

### 東風吹いて海鮮やかに藍となる

昭七

作者の他の投句「涅槃西風海の碧さの日ごと濃く」もいいが、日を特定しないで吹く東風の膨らみのある季節感でこの句のほうを採つた。湘南鎌倉の海とのこ

とだが、黒潮が強まる日差しのなか相模灘沖から黒潮の蛇行が近寄り、やがては「初鰯はるかな沖の縞を着て」(渋谷道)の季節となる。印象派の絵を見るような佳句である。

### 一句鑑賞

武者昭七

### みな若くみな鬼籍なり春の夢

幸一

三好達治の詩「草千里浜」の一節にに言う。「若き日のわれの希望(のぞみ)と二十年(はたとせ)の月日と友とわれをおきていづちゆきけん・・と。「死者はいつまでも若い」と言つたのはだれであつたか。「おれもおつけ行くからな」とはだれの弔辞であつたか。ぼくらの一生はまこと「春の夢」にも似てはかない。ここに沁みる句だ。

### 涅槃哭く氣絶の僧の横たはる

高志  
みち

一句目。鬼の目にも涙というけれど鬼だつて、商売道具の金棒放り出してまで大声をあげて泣くことがあるのだと作者はしみじみと涅槃図を眺めている。二句目のお坊さんは(余計なことだけれど)なんで「氣絶」してしまつたのだろう。号泣のあまりなのか、息せきつてかけつけたせいなのか。号泣する衆生をよそに一人気絶して長々横たわるお坊さんの寝姿に僕は何か親

しみやら滑稽やらを感じて微笑んでしまうのだ。しかし絶とはおおげさな。作者の余裕の目せいだらう。寝姿の涅槃に似たる炬燵かな

健一

炬燵に足入れて長々寝そべるひと時はまさに極楽だ。おりから涅槃会の時節。ふと涅槃についた釈迦の寝姿が思い浮かぶ。釈迦様の寝姿はこんな格好だつたかななどと考えているうちにやすらかに寝入つて。この世の極楽はこころも形も釈迦の涅槃に通じてゐる。

老いてなお親友のあり桜餅

紀子

茶飲み友達などというけれど、老いて後まで親友と呼べる人がいるのは幸せだ。その幸せは桜餅のほのかな甘さと紅の色に通じてゐる。その喜びが句のリズムにおどつてゐる。

うららかや小さくなりし母と歩む

正美

背丈の縮んでしまうのは仕方がないながらやはりさびしい。うららかな春光がそんな悲しみをやさしくつつんでくれる。その嬉しさ。

一句鑑賞

飯田孝三

春の夢草間弥生に魂抜かれ

紀子

ご存じ「水玉」の草間弥生先生、滯米、若き前衛女流（失礼）騎手も、今や文化受賞の重鎮。大小、幾千幾万の水玉の浮揚感とおはこ「南瓜」の圧巻の存在感

は、無垢、充実の対照よろしく、見目艶やかに蠱惑、深淵、人は恍惚の境に「魂抜かれ」る。終辞けれども、蕉門のかろみに通い、水玉のコスモスは「春の夢」さながら。名は体を現す、草間弥生は云い得て妙。

又巻かれゆくなり涅槃変のまま

幸一

冒頭「又」がくゆく「なり」と相呼応、つくづく抱懐が深い。さて、法会終えれば、国宝重文、各地の名刹古寺に伝わる涅槃図は、蹲る象の巨体も五百羅漢の悲嘆の顎も衆生の叫喚諸共に絵図に巻き戻され、年々庫裡の奥深く仕舞われる。「まま巻かれ」と返る詠唱は、六道輪廻にも適い巧まず手練。とまれ寡聞、永劫解脱の教程を弁えず、余言慎むに如かず。

涅槃会の花供御はなくそ という豆を買ふ

みち

花供御の読みが「はなくそ」とは恐れ入る、黒豆の一種のこと。いわゞもがな涅槃会の御献物のひとつ。「とく」と嘯く、そらとぼけが、「豆を買ふ」の素つ気なさと相乗り、ほのぼの飄逸。上質のエスプリが小気味よく、御尊顔の涅槃は思わず微苦笑、悲嘆の淵の衆生もふとわれに返るかも。いやはや今年の涅槃会は暖か、肌汗醸す日和だつたなあ。

玉仏寺白玉石の涅槃像

正美

不明、「玉仏寺」を知らなかつた。上海の名刹の由、「白玉石」は白瑪瑙。さて涅槃像はどれも凡そ美形、

白哲。羅漢、百獸の鳴咽、叫喚の囲に横たわるおん姿が、眼前、いと際やかに浮かびくるのだ。白瑪瑙の由来、産地のほどは詳らかにしないが、仏教伝来の「天路歷程」に遠く思いを馳せずにはいらねない。

### 「不要捕捉野鳥」と札や轡れる

陽一

はて安房、上総はどこの森だろう、明るい日射しに「治外法權」の春を謳歌する百鳥の轡りが溢れる。けれんない「札や」の軽みと「轡れる」の円みは、うら瑠璃色の轡りそのもの。出だし「不要捕捉野鳥」の重々しさがめでたさを止揚して面白い。さらなる御託は耳を汚すのみ、宣々。

### 杉花粉山から天狗が飛んでくる

啓泰

上空から天狗のくしやみが聞こえる。ご自慢の超隆鼻、猖獗を極める花粉症の恰好の標的を免れない。あらあら、又々はつくしよん。いくら飛んでも、お氣の毒、村も町場も花粉の渦。はてはて天狗どうすんべ。御免、ついつい駄弁。～飛んで「くる」が目玉、天狗の飛びざまをまさと見せるのだ。

### 一句鑑賞

増田陽一

### みな若くみな鬼籍なり春の夢

幸一

想い見れば記憶にある親しい人々の多くが故人ではないか。しかしこれは春の夢である。自分が長生きし

### 涅槃西風海の碧さの日」と濃く

涅槃会の頃吹く風、西方淨土からの風とも言つ。春の寒さが消え、海の色が濃さをましてくる、と言うのも近くに住んで何時も海を見ている、という恵まれた環境でこそ判る季節。『日』と濃く』の推移感に胸打たれる。

昭七

### 杉花粉蒸氣機関車煙吐く

高志

戦後、日本の山は広葉樹、落葉樹を伐採してやたらに杉を植えた。本来の自然の植生を無視した採算本位の仕業であった。いま濛々と春の杉花粉が都市を襲う。その杉の植林を分けて行く蒸氣機関車の煙がまた時代遅れの郷愁を誘う、という鮮やかなこの対照。

子等よりもショートスカート春三番

孝三

トであろうか、春風に裾をなびかせながら。春一番では、風が強すぎてスカートがめくれ頭までかぶさつてしまう。三番位で丁度良い具合に春の日を浴びた女ざかりを見せる情景。「ショート」の一語が上下にかかる旨さもあり。

### どこの子も胸に括られ東風の街

みち

昔、子供はみな背中に「おんぶ」したのが近年はそれを前に廻したかたちで胸に括るようになつたのは良く見るけれど、掲句のように改めて見直した表現に何だかおかしみがあつて、目新しく春先の街が見えてくる。

### 東風吹くや天満宮の太鼓橋

多美子

幼年時、巨きな太鼓橋を仰いだ記憶がある。それは大阪の住吉神社だったけれど、渡つてゐる男女が天空を歩いてゐるようで、自分は恐くて渡れなかつた。掲句は道眞の歌の連想もあり、『天満宮』『太鼓橋』という大きな丸みのある語の連続によつて豊かな春を感じさせるのである。

### 寝姿の涅槃に似たる炬燵かな

健一

炬燵の周りを囲んで寝てゐる。『涅槃』は「煩惱を絶つて絶対的な静寂に達した、仏教における理想の境地」であるからこの家族団欒の春炬燵こそ涅槃である。また「寝姿の」と、この光景を見ている眼があり、真ん

中の炬燵を入滅の釈迦に見立てた涅槃図を連想して滑稽味あり、語のリズムも生かされた好句でしょう。

### 白い物盗む癖あり寒鴉

啓泰

鴉は好奇心旺盛で、好みのオブジェを蒐集する性質があり、スプーンなど金属のこともある。鴉の性質を断定して特色ある句。営巣なら或いは「春鴉」か、とも思う。

### 春の夢草間弥生に魂抜かれ

紀子

草間女史に見せたら喜ぶであろう。嘗てのニューヨークで必死の前衛作家が、円熟して本国で大暴れしているのはめでたい。先日、私も驚嘆して拝見しました。

### 植物園甘草の芽を柵園

宏之助

甘草は生薬として鎮痛、鎮咳剤に使われ、また甘味の成分となる。ここは素朴な自然植物園で、他にも芽を出しかけた植物は多いけれど、作者は甘草の芽が大切に囲われてゐる園のかたちに興味を持つたのである。麗らかや小さくなりし母と歩む

正美

年老いて元気な母と娘の幸せな散歩。麗らかな春光の下と言うのどかさ。この主題にはどうしても既視感が出るけれど「麗らかや」で心地よい句となつてゐる。

### 俳窓評論纂

\*うたをよむ 永末恵子氏没後一年（投稿 竹中宏）が

朝日の三月俳壇歌壇中央欄に載つた。六二才で急逝して一年、俳歴は二十年に満たなかつたが、「火の後ろふに二月の蓮畑」「青草原あまりのことに生まれけり」「松風を刺身と思う女かな」「つらゆきを枕に枯れてゆくのだな」などの句がある4冊の句集を残した。読後ふと、透明な空気の波動のような気配だけが手元に残され、それ以上の何を読んだのでもなかつたと思われる。作者の求めるものも、それだつたのだろう。確かに何かを手づかみにしようとする大方の俳句と異なる志向といえる。氏は「行きて帰る心」を俳句の要諦としてよく口にした。これも三冊子の中に伝わる芭蕉の語である。当然ながら、創作は永遠の静止状態からは生じない。（この評論はかなり難しい。レジグナチオーンという独語があるそうであるが、故吉野俊彦氏はこれをあきらめの哲学と称した。右の俳句を読むとこの人は己を早くからあきらめて主張をしないと決めたのだろうと思つた。）

\*陽一さんから貰つた小熊座2月号に「鬼房の秀作を読む」（78）がある。不二男忌や時計ばかりがコチコチと（平成13年愛痛きまで）を一人書いておられる。一人は「鳥わたる」（き）と罐切ればを連想されての句であると、もう一人の方は、不二男から鬼房への形見としての時計ではないだろうか、と想像されている。（秋元不二男は宏之助さんの初師であり、天狼創刊に西東三鬼

とともに尽力された有名な俳人である。ここで私如きが書くのも憚れる偉い人である。子を殴ちしの句も好きだが、私が一番驚いたのは、人工肛門のおなら優しき師走かなであり、上五にはオストミーとルビで読むのだから、ここまで境地になつた方である。孝三さんの喇叭水仙の句にも思いが至つた。）

\*先月書いた話題アニメ映画を観た。こうの史代の「この世界の片隅に」である。原爆ものをたくさん観て来た私は感動しなかつた。むしろ、協力者の名前が画面いっぱいに長々映されていたのに感動した。二月25日のBe版にこの映画のことが詳しく載つた。3月に入つて折々のことばに「大づ」とじやつたの三連節に鶴田清一の解説が載つた。気がつけば、時代は悪いほう、悪いほうへ流されている云々。

### 句集「走馬燈」を読んで

飯田孝三

句集『走馬燈』（杉山マサ子）をいただいた。昨年十二月に上木された、正美さんのお母さんの句集である。七十歳を過ぎて俳句を始められた、平成九年から二十年にわたる作品を年次に収録する。句集の成り立ちと著者の人となりについては、高志さんがつとに紹介されている（70号）。目を瞠り、心に染みる諸作より紙幅のかぎり挙げてみたい。

日盛りの草引き汗の目に痛し

（平成九年）

荒川を渡る雁見し千住駅

(平成十年)

(平成二十年)

春立つや訪問看護待ちてをり  
原爆忌鬼灯の種出してをり

(平成十一年)

(平成二十二年)

花冷えや雨の街灯日本橋  
まゆはきの月の残りて寒日和

(平成十二年)

(平成二十三年)

風鈴市二回りして一つ買ひ  
立冬や野武士の如く鯉およぐ

(平成十三年)

(平成二十四年)

主なき上段の靴十一月  
鬼灯の網目のなかをのぞきけり

(平成十四年)

(平成二十五年)

睡蓮の下より鯉の湧き出づる  
うたた寝に亡夫の声する春炬燵

(平成十五年)

(平成二十六年)

水草に泡の湧き立つ大暑かな  
夜桜に程良き風の出でにけり

(平成十六年)

(平成二十七年)

芭蕉布に合ふ帯さがす更衣  
足るを知る土用蛻の熱き汁

(平成十七年)

(平成二十八年)

孫七人曾孫一人龍の玉  
子規庵の糸瓜したたか二十本

(平成十八年)

(平成二十九年)

裁板に祖母の籠あと一葉忌  
葱坊主予報通りの午後の雨

(平成十九年)

(平成三十年)

新蕎麦や芝大門の更科に  
画廊の多き銀座裏

(平成二十年)

(平成三十一年)

数かぞへ浮くを待ちをり鳩  
五人目の孫の縁談菊日和

(平成二十一年)

(平成三十二年)

裁板に祖母の籠あと一葉忌  
葱坊主予報通りの午後の雨

(平成二十二年)

(平成三十三年)

新蕎麦や芝大門の更科に  
画廊の多き銀座裏

(平成二十三年)

(平成三十四年)

数かぞへ浮くを待ちをり鳩  
五人目の孫の縁談菊日和

(平成二十四年)

(平成三十五年)

裁板に祖母の籠あと一葉忌  
葱坊主予報通りの午後の雨

(平成二十五年)

(平成三十六年)

新蕎麦や芝大門の更科に  
画廊の多き銀座裏

(平成二十六年)

(平成三十七年)

数かぞへ浮くを待ちをり鳩  
五人目の孫の縁談菊日和

(平成二十七年)

(平成三十八年)

七夕や子等の願ひをのぞき見る  
実千両孫の縁談整ひぬ

(平成二十年)

つくばいに水飲む雀日の盛り  
産土へ道一筋や桑熟るる

(平成二十一年)

ビル群の中の校庭桜咲く  
杉板の塀に節浮く残暑かな

(平成二十二年)

競馬場の道の両側桺の花  
急がずに此の道を行く師走かな

(平成二十三年)

菩提樹の簷目美しき青薄  
淑氣かな注連縄太き夫婦楠

(平成二十四年)

観覧車遠くに光り日脚のぶ  
朝市や大根の山土匂ふ

(平成二十五年)

四人の子此のねんねこに育ちたり  
大笊に干す切干の良く渴き

(平成二十六年)

遠山のほのと動めく二月かな  
門前に春火桶置き煎餅屋

(平成二十七年)

中位とは此の位老いの春  
まづ、句歴の初っぱなから目白押しの佳什に驚く。  
力まず飾らず、季語はじめ言葉が一つ一つ息づいてい  
る。やさしく深く、調べ自ずから滑らかだ。なにしろ  
全六百十七句から僅かに選んだので、句境の一部しか  
伝えられないのが残念だが、まるまる昭和から平成に  
かけての、様々な時代を弛まず生きてこられた、日本本

の母が目に浮かぶ。

(平成29・03・16)

賢治童話 やまなし

武者昭七

受贈誌（H29年3月号）

平野ひろし

寒戻り佐保姫息を綺交ぜて（彩133号）

野木桃花

畠踏めば畠のやはらか木の芽雨（リ）

理佳江

屋敷神祀る庭ぢゆう路の薹（リ）

武子

やはらかき少女の鎖骨ミモザ咲く（か3月号）

文男

初雪を零と落し柿葺き（リ）

璃子

蕨餅提げて友訪ふ昼下がり（リ）

守啓

池の面を走りて梅の風となる（東京ク3月）

春の雲鳶平然と梁歩く（リ）

鶴職は梁をすたゞ春の雲 としてはいかが。

こだま

山尾かづひろ吟行ノート（H29・03・03）

飯田孝三

春塵の一駅戻る医者通ひ 雛飾る末っ子は手づくり卵雛

漢字表に芯の加はる牡丹の芽 春日射す靴の汚れをはづかしむ

黒髪の乱れに群るゝ胡麻斑蝶 蟻梅が真っ黄に咲いて暁空

光みち  
光成高志

「やまなし」の出だしは明るく軽快です。谷川の底の二匹の蟹の兄弟の会話からそれは始まります。

「クランポンはわらつたよ」「クランポンはかぶかぶわらつたよ」「クランポンは跳ねてわらつたよ」「クランポンはかぶかぶわらつたよ」・・・クランポンとはなんのか、誰なのかなんの説明もないままに何度も何度も繰り返されるけれど気にならない。軽快で明るいリズムがなんとも楽しく読み手はそれに惹かれてしまう。それはおそらく兄弟の口から吐き出される泡か水底が吹き上げる泡なのでしょう。それが夢のようにゆらゆらと立ち昇り、はじけて消えるさまを兄弟は楽しんでいるのです。ここには「流れに浮かぶうたかたはかつ消えかつ結びひさしくとどまりたるためしなし」というような古典風な陰湿さはない。「クランポンは死んだよ」「クランポンは殺されたよ」・・・というような深刻なせりふさえも笑い飛ばされてしまうのです。

そんな水中に暗い影を落とすのが兄弟の周りを泳ぎ回る一匹の魚です。「お魚はなぜあ行つたり来たりするの」という間に兄さん蟹が応える言葉は「なにか悪いことをしているんだよ。とつてるんだよ。」です。実はお魚は水中の生き物を餌として呑み込んでいるの

です。殺生の罪です。しかし事件はこれで終わらない。かわせみのコンパスのように黒くとがったくちばしが突然おそいかかり魚の白い腹がぎつらと光つていつぺんひるがえり上のほうへのぼつたと見るや魚の姿はそこになく何事もなかつたように泡はつぶつぶ流れ光の網はゆらゆらゆれているのでした。「お魚はどこへ行ったの」という問いに「こわいところへ行つた」としかお父さん蟹はいいません。さつきまですぐ近くを大きな口をあいて泳ぎ廻つていた隣人が突然なにもにかに「怖いところ」に連れ去られ影も形もないのです。

「こわいよお父さん」兄弟はお父さんにはがりつきます。他者の命を食べ、食べられるという生き物の世界の残酷さを兄弟は初めて目の前に見たのです。しかし修羅のあとに水面を滑つていくたくさんのはい樺の花びらを寫すことを作者は忘れません。

やまなしの第二編は夏が去り秋を迎えた同じ蟹の一家です。蟹の兄弟ももうよほど大きくなりましたが持ち前の陽気さは失いません。あいかわらずあわの大きさに比べ夢中です。そんな兄弟を驚かしたものは枝から落ちてきた円いおおきなやまなしです。やまなしはいいにおいをいっぱいふりまきながら谷を流れています。一家はやまなしのあとを追います。やまなしは木の枝に引っかかるとまりお父さんは「おいしそう

だね」という子供たちを制して「一日ばかり待て」といいます。二日の間にやまなしはいい具合に熟しておいしいお酒ができるからというのです。いい匂いの中を三匹は満足して自分の穴に帰つて行きました。二日あとを楽しみにしているにちがいありません。これでこのお話はおわりです。

第一篇は一見平和な暮らしの裏側に潜む恐怖と死のかげを、第二編はたとえそれが東の間のものであるにせよ暮らしの希望と悦楽を語ります。そんな危うい二つのもののあいだを生きているのが僕らの「いのち」というもののように思えます。

賢治は「わたしの感じないちがつた空間に／いままでここにあつた現象がうつる／それはあんまりさびしいことだ／（そのさびしいものを死というのだ）」とうたっています（春の修羅 噴火湾）。賢治にとつて死は異次元世界への空間移動なのです。お魚の最期の様子はそんな死のかたちをよくつたえているようです。（一〇一六・九・一三）

### お便り広場（到着順、敬称略）

前略二月になつたと思つたらもう終わりになりそう。何事もなく暮らせる事に感謝しながらがんばつていまます。峯子は車で時々来て話して帰ります。私は自分で

は動けないのでどこにも行けないと自分で考えて居たけど、高志さんのハガキを読み少しでも私に出来る事をしなければと思いました。健兄にも長い間会つてないです。皆さんから常に自分の足もとを見て行けと云われそれが身について自分の事ばかりに生きて来たのでこれからは少し誰かのためにもがんばる自分になりたいです。廣本さんに見せましたよ。すばらしいですねと、奥様が返して下さいました。お身体だけは大切にね。

(2.23)

幸子)

句会毎回楽しく出席させて頂いています。有り難うございます。72号には何と二十年も前（！）の拙いエッセイが載つていて、びっくりするやら恥ずかしいやら複雑な感じでした。この間の大穴であの辺りは？など心配です。文末の「鼻白んで・・」というのは、それまでの「孤高の詩人」という蕪村のイメージにそぐわない感じがしたためです。和漢朗詠集慶滋保胤の詩句が出典とはその時知りました。選句欄の省略はすつきりした感じでいいと思いました。得票の数はその句の下にというのはどうでしよう。俳誌としての出発というお考え素晴らしい。いよいよのご発展を祈ります。みち様にもよろしく。お大事に。

(2.27)

昭七

ようなニュースもありませんが今年はなぜか私にて訃報が多くて大変だ。徳田の佐藤進さんが享年92才で亡くなつた。ゴルフの友人や年金友の会の友人が若くして亡くなつた。私はまあ元気でゴルフや野菜作りの準備などしています。高志も変わりなく元気でいることとお察し致します。心にゆとりをもつてゆつくりとゆつくりと。寺めぐり坂をのぼりて瀬戸の海、スタンプめぐりをしたがちょっとときつかつた。(3.9 健三)

尾道の寺を巡りぬ春の海

(みち添削)

雛納めもお済みでしようか。気温の乱れもいま暫くのことと存じますがお障りありませんか。御誌二月号頂いてから、何やかやとある上に怠け心がわざわいし失礼しておりました。政治家のお好きな事案が多く世界的なことが増えてきましたね。信じられないことばかりです。私共の句会では三月兼題、蛙です。我孫子市は田とか沼が又池や農業用水とかあるように思い蛙の声など聞こえるのでは、と羨ましく思います。お大切におすゞし下さいませ。ごきげんよう。(3.11 璃子)（我が家は雛人形を内裏様と官女雛のみ残して人形供養に出しました。雛出し雛納め、しんどくなるもんですね。蛙のことなどその通りです。前方に沼干拓田が広がつてお、利根川への手賀川には水禽がいつもいます。沢潟やつひの栖は水の郷（みち）の句を思いつゝ過ごしております。高志）

桜が咲き済つておりますが近くの神社の河津桜は花期が長くまだ美しさを保つております。俳句は独学で一人楽しむことができますが、句会に出ることがやはり不可欠かと思います。より楽しさを味わうためにはとこの頃つくトヽ思いました。国会も変なことが起つて本来の議事が進まず大変ですね。そんな中安倍サンは歴訪とか（ヨーロッパ）。白金葭に雨の恵みが沢山ありますように。

三月十三日

長屋璃子

光成高志様

よろしくお願ひ致します。

（3.14 啓泰）

三月の句会で初めて佐藤宏之助氏にお会いした。聞けば氏は山口誓子の晩年から死去まで十六年間師事し、その後は茨木和生の「運河」に加わった。同じ誓子門下生の光成氏とは旧友であり、これからも白金葭の句会にも顔を出したいということで、わが白金葭がかくも優れた先達を連衆に迎えられるのはじつに喜ばしい。

俳人の方に先師への酬恩という気風があるが、佐藤氏はそれを受け継ぎ高幡不動尊にある誓子の句碑を師の墳墓として毎月参詣を欠かさないというから、律儀な人である。句会のあと旗亭で歓談したが、その席で氏が気恥ずかしげに「俳壇」誌を取り出した。見ればその誌上で佐藤氏が所属結社「運河」を背負つて他の結社の実力俳人と同一季語での作句競詠をしている。俳句綜合誌のジャーナリストイックな特集で、他流試合のように各結社の代表選手を咬み合わせてお手前拌見という風雅からは遠い企画だが、それに出場を頼まれたのは氏が実力俳人として認められている証しであるにはちがいない。歓談はその競詠句をめぐつて盛り上がつた。春の季語に「亀が鳴く」というのがあるとは初めて知つた。その季語での氏の作句は、たしか天明の浅間大噴火の溶岩原で亀が鳴くといわれているという句であつた。じつに奇想天外な取り合わせの句で、私は登攀不可能の句想というほしかなかつた。「ほんとうに亀は鳴くの？」という声に続いて「みみずは？」という声も出た。もちろん鳴くのだと答えがあつた。发声器官のない亀が果たして鳴くだろうか？ 交尾の頂点で鳴くのだと尤もらしく断定する声。おなじ爬虫類ということで、私はいつかテレビで見た毒蛇ハブの深夜の交尾場面を思い出した。それはライトアップのなか、真っ白な二匹の蛇体が絡み合つたまま舞うように地面から宙に立ち上がる蠱惑の極致というべき光景だつた。しかし終始無言で演じられた。周知のように亀は産卵のとき涙を流すが、はたして亀は鳴くだろうか。ついに結論は出なかつた。季語「踏青」の句は知恵遅れの少女との野遊びを詠んだものだつたが、弱者

への憐憫に満ち作者が情の人であることを示すもので  
あつた。一読して蕪村の「愁いつつ岡にのぼれば花い  
ばら」に通じる感傷と哀愁とを感じさせるいい句と思  
つた。(以下略)

(3.19 磯目健二)

先日の句会はお世話になりました。毎回帰りの車に  
乗せていただき、お心配り恐縮です。コビアンでの歓  
談も楽しいかぎりでした。花ざかり目前、ご夫妻共々、  
御身お大事にご健吟下さい。

(3.21 孝三)

### 我孫子日記

2/17	例会
2/22	SOA
2/26	木下
*	3/7
*2	北総病院
	3/8
	SOA
*3	寸又峠
	3/10
*4	金谷
	3/12
	シネマ
	3/14
*5	感應寺
	3/15
	SOA
	3/17
	例会

\*5 いぬふぐり東海道の石畳  
涅槃図の余白を埋める蝶・百足  
象の鼻蓮華を捧ぐ涅槃絵図

白木蓮名鐘高く感應寺

みち  
高志 リ  
みち  
高志 リ  
みち  
高志 リ

\*直角の機械畠塗りでらくくと  
春光や化粧廻しの横綱碑  
休み畠覆ふ紫仏の座

\*3 杉花粉松山杉山七曲り

春塵の立つ河川敷大井川

SLにハモニカ流れ春の風

\*4 日蓮の涅槃合掌し給へり

日蓮の涅槃図武士も誦経せる

春日をきらきら返す茶畠哉

高志 リ  
みち  
高志 リ  
みち  
高志 リ  
みち  
高志 リ

選句と鑑賞文がお願いした曜日通りに届けられましたので、水曜日に後記を打込みました。感謝致します。今月の白金葭は呆けてますます白髪のようです。俳人の旗にふさわしいと思い本誌の名前にしています。来月ステント手術後、無事生還しましたら、俳誌として再出発の投稿依頼ハガキを投函するつもりです。俳友学友親友畏友三六通内俳人二〇名位です。おそらく数人しか句をいただける人はいないだろうと思いますが、私としては一通過点ですから思い切って行動します。皆さんにおかれましても、そういう知人がおられましたら、白金葭を紹介して下さいますようお願い致します。

白金葭(3月号 (73号) 平成29年3月発行  
編集・発行人 1119光成高志 (〇四一七一八七一〇六八)  
発行所 2701119我孫子市南新木2-14  
表紙の題字 加納綾女 写真 3月22日の白金葭